黒沢尻工業高校専攻科　　平成３０年度
（第 20 回）　地域産業「企業経営者からの講演会」

「中小企業に今後求められるグローバル人財について」

～マイカンパニー　インターナショナル～

１）日時・・・・・Ｈ３０年６月２７日（水）10：40～12：10
２）講師・・・・・(株）阿部製作所
代表取締役　　阿部　　文三氏
専務取締役　　阿部　　紀子氏
３）対象・・・・・黒工専攻科１年９名
４）場所・・・・・黒工、会議室　　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　阿部　昌明(記)

代表取締役　阿部　文三氏

専務取締役　阿部　紀子氏

阿部代表取締役のお話し

・ 弊社の社員は黒工卒が 70%を占めており、今日の出前授業を楽しみにしていました。今日の講話は、①会社概要説明②弊社の中国への工場進出の実態③真のグローバル人財とは。について①②を私が③を専務取締役からお話ししたい。

・ **①会社概要**・・1963 年 9 月に阿部頼人先代社長が創業開始ですので 9 月には創立 55 周年を迎える事になります。1973 年に株式会社として法人化し、1976 年には岩手東芝ｴﾚｸﾄﾛﾆｸｽ(株)との取引が開始され、半導体用精密金型部品製作に始まり委託加工を引き受けるまでに業容が拡大しました。2002 年 7 月に中国・蘇州に阿具精密電子有限公司を設立し、創業 15 年を経過しましたが今では本社工場と同規模の生産体制で各種金型設計製作を行っています。また本社工場、蘇州工場とも其々の地域にある各業界の大手企業を顧客としていますが、弊社の特色でもある金型製造技術（創業 55 年の実績）半導体委託組立（組立 28 年の実績）中国・蘇州工場操業 15 年の実績が顧客からの信頼を得ていると思います。

＜金型製造プロセス説明、半導体のできるまで（前工程・後工程）と半導体用金型について説明＞

・ **②弊社の中国への工場進出**・・中国・蘇州に進出するキッカケは先代社長が山登りが趣味で台湾の山登りで知り合った現地社長と意気投合し、台湾の社長の中国工場を見学した時に世界の製造工場が中国になると、予見した事が始まりで広い中国でも中央地帯は電気電子関係の企業集積地である事を現地で確認し、一人で蘇州に渡り、言葉も不十分な中、一人で工場建設に邁進した。中国進出にはリスクも予想されました、つまり価格です、価格が独り歩きし顧客からは低価格を要求され、品質については重要ではない地域性がありましたが弊社では品質の重要性をキーワードに顧客との交渉の結果、顧客の理解と信頼を得る事が出来、新規顧客拡大にも繋がりました。また、リスクの一つに国民性かも知れないが近隣の雇用条件と比較され社員の定着率が良くなかったが社員厚生棟の設置など福利厚生に配慮した結果 1 期生社員も今では幹部社員として育って来て、本社工場との親子関係も健全な競争で双方の良い所を切磋琢磨しながら相乗効果を上げ、小さな会社でも国境を越えるビジネス展開をしています。専攻科

の皆さんには海外も視野にしたグローバルな活躍を期待したいと思います。

- **真の意味でのグローバル人材とは？～父・阿部頼人の事例から～**　　＜阿部専務から＞

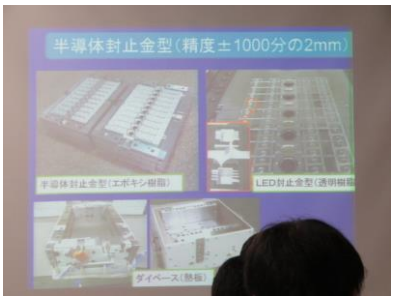
  創業者である父は夢のある人で創業間もない小さな個人経営工場を 10 歳の私に向かって世界に出るか、苦労せずに個人経営が良いか、を問い掛けられ苦労が多くても会社を法人化し世界に出たい、と返答したら速やかに法人化への手続きをし、会う人ごとに「マイカンパニー インターナショナル」を口癖の様に話し掛けていた事を鮮明に記憶しています。又、旅行が好きで肝臓がんを患い余命 3 か月と宣告を受けてから世界の最高峰の山々に登頂し、インカ帝国のマチュピチュを見に行き、そして中国工場を立ち上げた。その先々で各国の国民性や常識が日本とずれる事があっても人間としての接し方でコミュニケーションを自ら求めて行く姿を見て、この姿が真のグローバル人材と言えるのではないかと思います。是非、皆さんには「自分で自分を励まし、より高い目標に挑戦して下さい」

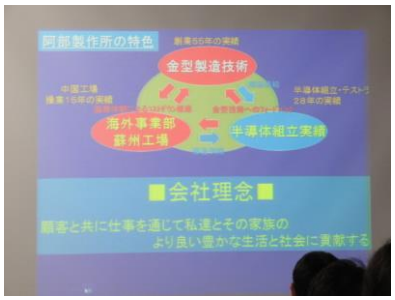
  ―以上―

- 弊社への関心があれば何時でも工場へお出で下さい、工場内を案内致します。

- **質疑応答**

  Ｑ：岩手県職業能力開発協会から技能検定促進功労賞を受賞されたとの事ですが？
  Ａ：技能資格取得については合格者には掛る費用は会社負担とし、資格手当金も支給しています。
  Ｑ：金型加工での主要な加工は？
  Ａ：熱処理後の研削加工と放電加工の仕上げ加工が金型精度に左右します。
  Ｑ：学生時代に身に付けておく事は？
  Ａ：人に伝えられる（教えられる）得意なモノを持つ事。
  Ｑ：金型の生産台数は？
  Ａ：新規金型や保善金型など、生産形態が種々あるが凡そ 4～5 台／月位です。
  Ｑ：御社の此れからの目標は？
  Ａ：金型は自動車の様に量産による規模拡大では無く、常に顧客の要求以上のＱＣＤを提供し、利益を確保する事が経営目標であり、その為にも中国工場と本社工場での良い所を研鑽しあい、ＱＣＤの向上を図っている。





プレゼン資料から

質疑応答の様子、専攻科修了研究作品をご覧になる